

高温に対する園芸作物の技術対策について

井笠農業普及指導センター

7月以降、気温が高い状態が続いています。8月の月平均気温の平年差は、山陰で+1.8度、山陽で+1.9度となり、山陽では1946年の統計開始以降、8月として最も高く、記録的な高温となりました。今後も、更に1か月程度は暖かい空気に覆われやすいため、気温の高い状態が続く見込みで、9月12日に広島気象台発表の「中国地方1か月予報」でも、向こう1か月の平均気温は高い確率が80%と予報されています。

つきましては、今後の気象情報に十分注意するとともに、次の対策を参考に地域の実態に応じた技術対策をお願いします。

1 果 樹

(1) 全種類共通（高温乾燥対策）

- ・水分競合や蒸散による水分消費をできるだけ少なくするため、原則として園内の雑草は刈り取り、敷草とする。ただし、過度な高温、乾燥でかん水が十分実施できない場合は、除草せずに地温の上昇を抑える。
- ・地温の上昇と地表面からの蒸発を防ぐため、敷わら(敷草)を行うのが望ましいが、わら等のマルチ材料が十分確保できない場合は株元近くの根の多い部分を重点に行う。
- ・かん水量を十分に確保できない場合は、根の多い部分を対象に、夕方に局所かん水を実施する。

(2) もも

- ・収穫後の樹勢回復のためにかん水を実施し、10日間隔で20mm程度かん水する。
- ・樹勢の低下が認められる樹では、夏(秋)季せん定時に極端な太い枝を切りすぎないようにする。
- ・早期落葉が懸念される場合は、ダニ類等の防除を行う。

(3) ぶどう・温室ぶどう

- ・成熟期に達した果実は、高温下では果肉の軟化や日持ちの低下を生じやすいので、速やかに収穫する。
- ・高温時には着色が遅れやすいので食味や晩腐病の発生程度を確認して出荷し、収穫遅れに注意する。
- ・土壌が乾燥する場合は、定期的にかん水を行い果肉の軟化や日持ちの低下を軽減する。極端な乾燥状態時に大量のかん水を行うと裂果の発生が懸念される。簡易被覆では成熟期まで3～5日間隔、成熟期～基肥時期は5～10日間隔で15～20mmかん水する。
- ・貯蔵養分の蓄積を妨げる伸長中の副梢は切除する。
- ・早期落葉を防止するため、ハダニ類、べと病、さび病等の多発園では防除を行う。

(4) なし

- ・成熟期に達した果実は、高温下では日持ちが低下しやすいので、速やかに収穫する。
- ・「新高」等では、夏季に高温乾燥状態が続くと煮え果が発生しやすいので、計画的にかん水を行う。
- ・着果樹は水分の消費が大きいので、成熟期に達した果実は速やかに収穫する。
- ・早期落葉を防止するため、うどんこ病、ダニ類、ゲンバイ類等の多発園では防除を行う。

2 野 菜

(1) 夏秋トマト

- ・日射が強いと蒸散量の増加による茎葉の萎れや尻腐果などの生理障害が発生しやすくなるので、生育ステージに応じたかん水管理に努める。
- ・尻腐果の発生が予想される場合は、開花している花房とその上の花房の周辺葉に塩化カルシウムの200倍(0.5%)液を葉裏に向けて葉面散布する。
- ・果実収穫後に25℃以上の高温や強い直射日光に当たると黄変果になりやすいので、出荷調整は涼しい場所で行い、直ちに予冷する。
- ・コナジラミ類、ハスモンヨトウ等の防除を徹底する。

(2) 夏秋きゅうり

- ・日中に葉の萎れがみられる場合は、吸水量に応じたかん水をする。
- ・草勢が弱い場合は、不良な幼果等を摘除し、液肥を施用して草勢の低下を防ぐ。
- ・ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類、ハスモンヨトウ、褐斑病等の防除を徹底する。

(3) 夏秋なす

- ・不良果は、早めに摘除する。
- ・日射量や生育ステージに応じたかん水管理に努める。
- ・ハダニ類、アザミウマ類、ハスモンヨトウ等の防除を徹底する。

(4) アスパラガス

- ・日射量や生育ステージに応じたかん水管理に努める。
- ・アザミウマ類、カメムシ類、ハスモンヨトウ、褐斑病等の防除を徹底する。

(5) 冬春なす

- ・日射が強いと蒸散量の増加による茎葉の萎れや尻腐果などの生理障害が発生しやすくなるので、生育ステージに応じたかん水管理に努める。
- ・施設の妻、サイド、天窗等を開放して換気を行い、昇温抑制対策を行う。
- ・アザミウマ類、チャノホコリダニ、ハスモンヨトウ等の防除を徹底する。

(6) いちご

- ・品種や生育状況にあわせて花芽分化を確認し、適期に定植する。
- ・炭疽病、萎黄病、疫病、ハダニ類等を本ぼに持ち込まないよう防除を徹底する。
- ・定植1週間前から本ぼハウスの開口部をできるだけ解放し、寒冷紗等を被覆し、畝にかん水する等地温の低下に努める。
- ・定植後は活着を促すために、クラウン基部が乾かないように十分かん水する。

(7) だいこん

- ・高温期に播種する作型は、土づくりを十分に行い生理障害の発生を軽減する。
- ・ハイマダラノメイガ、キスジノミハムシ、コナガ、ハスモンヨトウの防除を徹底する。

(8) キャベツ、はくさい、レタス、ブロッコリー

- ・育苗中は、施設を寒冷紗で遮光し、気温の低い午前中を中心にかん水する。セル成型苗等では、かん水不足やかん水ムラに注意するとともに、徒長防止のため日没頃には過剰な水分が残らないようにする。
- ・本ぼの土壌が乾燥している場合は、散水等により土壌水分を適湿にした上で、耕うん、施肥、マルチ、定植を行う。
- ・活着までに乾燥する場合はかん水する。特にはくさいは、定植活着期から結球初期に乾燥させると石灰欠乏症（縁腐れ、心腐れ）の発生を助長するので注意する。
- ・ハイマダラノメイガ、キスジノミハムシ、コナガ、ハスモンヨトウの防除を徹底する。

3 花 き

(1) 露地花き（りんどう、きく等）

- ・敷きわら等でのマルチを十分に行い、土壌表面の乾燥防止に努める。
- ・降雨がない場合は、なるべく気温が低い時間帯に畝間かん水を行うが、長時間の滞水は避ける。
- ・短時間の集中した降雨では、畝内に水分が浸透しない場合があるので注意する。
- ・西日が当たる側の畝の地温は高温になりやすいため、畝の側面にもわらの束等を設置し、マルチ内温度の上昇を防ぐ。
- ・必要に応じて寒冷紗等で遮光を行い、植物の表面温度の上昇を防ぐ。
- ・ハダニ類、アザミウマ類等は高温・乾燥で多発しやすいので、防除を徹底する。
- ・りんどうでは、白絹病の発生に注意する。

(2) 施設花き（ラークスパー、ばら等）

- ・直播や定植を行う施設では、一週間程度前から寒冷紗等で遮光し、畝にかん水するなど、地温の低下に努める。
- ・定植時から生育初期まで及び花芽の分化発達期の植物には、各生育ステージに合った土壌水分の確保に努める。また、かん水は日中を避けて行う。
- ・施設の妻、サイド、天窓等を開放して換気を行い、必要に応じて寒冷紗等で遮光し、昇温抑制対策を行う。
- ・ハダニ類、アザミウマ類等は高温・乾燥で多発しやすいので、防除を徹底する。

農作業中の熱中症に注意

暑熱環境下での農作業は、熱中症（熱射病、熱けいれん、熱まひ）を生じる恐れがあるので、次の事項に注意してください。

- ・日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等、作業時間の工夫を行う。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給する。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に気を付ける。
- ・帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をする。作業場所には日よけを設ける等、できるだけ日陰で作業するように努める。
- ・屋内では遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度が著しく上がらないようにするとともに、風通しをよくし、室内の換気に努める。作業施設内に熱源がある場合には、熱源と作業者との間隔を空けるか断熱材で隔離し、加熱された空気は屋外に排気する。